

〈研究ノート〉

## 札幌と保育の歴史に関する研究序説

山内太郎・野崎剛毅

山内太郎 札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科

野崎剛毅 札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科

### Research on the history of kindergartens and childcare centers in Sapporo

Taro Yamauchi (Department of Preschool Education & Child Care, Sapporo International Junior College)

Yoshiki Nozaki (Department of Preschool Education & Child Care, Sapporo International Junior College)

The purpose of this paper aims to clarify the history of kindergartens and childcare centers in Sapporo, particularly regarding the Meiji and Taisho periods. There are many previous studies on the history of early childhood education. However, those descriptions are biased toward large cities and some kindergartens. So in Hokkaido, few have summarized the history of kindergartens and childcare centers.

Unlike in other regions, the characteristics of Sapporo that private and Christian kindergartens lead the progress in early childhood education are evident. On the other hand, there are many unknowns about childcare centers in Sapporo. For example, it is thought that there were childcare centers in some factories, but little is known about their details. In addition, childcare centers in Sapporo were closely associated with poor women such as nanny girls, female factory workers, and geisha prostitutes. It can be said that Sapporo developed at the expense of women. This reminds us of the need to reconsider the history of Sapporo's development from a gender perspective. Especially, childcare centers were the facilities that revealed various contradictions of Japan's modernization. We would like to continue our research from this perspective.

キーワード：札幌 幼稚園 保育所 幼児教育史 保育史

Keywords : Sapporo kindergarten childcare center history of early childhood education history of childcare

### はじめに

本研究の目的は、明治期以降の札幌において様々な地域に点在する幼稚園・保育所がどのような背景から設立に至ったのかを札幌という街の歴史的状況とかわらせながら把握することにある。意外に思われるかもしれないが、札幌の保育の歴史を通史的に取りまとめた文献というものは存在していない。このまま歴史の中に位置づけるという作業が滞ってしまうと、確かにあったはずの事実が忘れ去られ、なかったことになるのではないかと。本研究は歴史を知りたいという素朴な好奇心とそうした危機感があって取り組まれることとなった。加えて北海道、とりわけ札幌という地域は開拓使の設置以降、他の都府県とは比べ物にならないスピードで街がつくられ近代化がすすめられたという特異性を持つ。「親以外の専門職による意図的な働きかけである『保育』は、人類の歴史の中では新しい近代社会の産物である」〔汐見他2017:4〕ならば、札幌の歴史的特異性を念頭に置いて保育の歴史を明らかにすることは、先行研究が提示している「近代化プロセスと保育の関係」の内容に修正を迫ることになるかもしれない。本研究はそうした野心的な試

みでもある。

とはいえ筆者らは歴史研究の専門家ではないため作業は手探りで始められた。本稿はさしあたってここまで収集した資料を整理することが目的となるが、それらのほとんどがいわゆる「二次資料」であり、歴史研究をするならば基本となる「一次資料」に当たることができていないという課題がある。この点についての批判は免れないが、まずは札幌の保育の歴史のアウトラインを描いてみることにした。また、紙幅の関係で今回は明治期から大正期までとなっており、それも施設の創立・設置に関する情報の整理が中心でそれぞれどのような背景があったかという点はほとんど検討できなかった。ただ、それでも札幌という都市の成り立ちと保育の歴史的な関係を見ていく必要性はある程度示すことができたと考えている。

用語の定義についても確認しておこう。本稿では幼稚園と保育所の歴史をそれぞれ分けてみていくことになるが、例えば汐見他(2017)の研究では保育所の歴史的経緯に伴う様々な呼称(保育所、託児所、託児場等)をまとめて「保育所的保育施設」と表記している。それに対して本稿ではそれらをまとめて「保育所」と表記しているが、工場託児所や季節託児所のように「託児所」とい

う表記を使っている場合もある。あえて統一せずにそれぞれの呼称を用いた方が当時の時代状況が反映されたと考えたためであるが、結果的に分かりにくくなったかもしれない。この点は今後の課題としたい。それと「札幌」の地理的範囲であるが、歴史的に札幌は1869（明治2）年に島判官が設置した札幌本府から札幌区、札幌市へと近隣町村を編入しながら形成されていった。したがってここでは山鼻村や琴似村、札幌村といった当時の札幌区域外も含んだ現在の札幌市域を想定している。

次節以降、まずは保育の歴史研究の動向を概観し、札幌を含めた地方の保育の歴史をまとめる必要性を指摘する。その上で明治から大正期までの札幌の幼稚園と保育所の歴史をそれぞれ整理する。なお、第1節と第2節は野崎が担当し、第3節と第4節は山内が担当している。

## 1. 先行研究

### (1)日本の幼児教育史研究

#### ①幼児教育・保育の通史に関する主な先行研究

日本の幼児教育・保育の歴史をめぐっては、その通史を整理しようとする試みがこれまでにもおこなわれてきた。それらは大きく、省庁や地方自治体、業界団体等による公的・半公的なものと、研究者による私的なものにわけられる。

公的なものの代表格は文部省（1969、1979）である。1876（明治9）年に幼稚園教育が始まってから90年、100年を記念して作成されたものであり、豊富な文部省統計や各種条文を収録している。

この他には各地域史、地域や学校種による教育史、学校史などがそれぞれ編纂され、貴重な資料となっている。

半公的なものとしては倉橋惣三・新庄よし子（1934）が先駆的なものとして挙げられる。日本の幼稚園教育に今なお大きな影響を及ぼし「日本のフレーベル」と称される倉橋惣三による著作ということもあり、公的な歴史と同等の扱いを受けてきたといえる<sup>1)</sup>。また日本保育学会が全6巻からなる通史を編んでいる（日本保育学会編1968a、1968b、1969、1971、1974、1975）。

私的な研究としては、保育問題研究会に所属する4人の若い研究者が著した一番ヶ瀬康子他（1962）が第一に挙げられる。公的、半公的な研究が行政側からの視点で書かれてきたのに対し、一番ヶ瀬らは「保母さんたちと、なまなましい現場の保育問題を学んでいるうちに」〔一番ヶ瀬他1962：1〕生じた問題関心からスタートしており、その根底に行政や巨大企業に対する痛烈な批判意識が流れている。

一番ヶ瀬らの研究は50年以上の歳月を経て汐見稔幸他（2017）に引き継がれた。汐見らは企画にあたって一番ヶ瀬らの研究をモデルとした。ただし、汐見らが着目したのは「保育の歴史が、社会事業史と、幼児教育史と

に分裂して学ばれ研究されてきたことへの反省」〔汐見他2017：374、原文は一番ヶ瀬他1962：1〕という視点であり、一番ヶ瀬らに見られた権力批判という態度は弱まっている。

個人による、特に明治、大正、昭和初期を重視した幼児教育・保育史の試みとしては、古木弘造（1949）、上笙一郎・山崎朋子（1965）、宍戸健夫（2014）などが挙げられる。特に上・山崎（1965）は、資料中心の研究が多い中で関係者に直接話を聞くという手法をとった点において貴重である。

#### ②先行研究の課題

公的・半公的な研究中心だった歴史整理の取り組みについては、これまでに多くの批判がされてきた。その批判は大きく2つに分けられるだろう。

1つ目は、幼保二元体制からくるものである。このことが制度上だけでなく歴史研究上の足かせにもなってきた。

学校制度上に早くから位置づけられ法制化も進んだ幼稚園に対し、保育所等の施設は地域や時代の要請によって様々な形をとってきた。文部省が幼稚園教育史を編纂したのに対し、厚生省・厚生労働省による公的な「保育所史」がないことがこの事情を象徴的に語っている。すなわち、幼稚園が早くから行政に主導され、「上からの」設置が進められたのに対し、保育所は地域の篤志家などに代表される「下からの」動きを行政が追認していく形をとった。そのため保育所はその定義づけさえもままならなかった。

例えば多くの文献、資料は赤沢鍾美・ナカ夫妻が1890（明治23）年に作った新潟静修学校附設託児所を「日本初の保育所」と位置づけている（例えば古木1949：110、日本保育学会編1968a：3、上・山崎1974：29など<sup>2)</sup>）。しかしこれ以前にも横浜の亜米利加婦人教授所（1871（明治4）年）、京都の幼穉遊嬉場（1875（明治8）年）、子守学校（1875（明治8）年に堺県で作られたものが初か。一番ヶ瀬他（1962：19）など、子どもを保育する施設は存在していた。なぜこれらではなく新潟静修学校附設託児所が「日本初の保育所」なのかについては、いずれの文献でも曖昧なままである<sup>3)</sup>。

先行研究に対する2つ目の批判は資料の制約によるものである。

当然のことながら、歴史研究は資料がなければできない。早くから行政が主導した幼稚園に対し、民間が主導した保育所などは史料が残っていないことが多く、結果として多くの通史は幼稚園、それも史料が充実している東京女子師範学校附属幼稚園や愛珠幼稚園などを中心に編まれている。

特に日本初の幼稚園とされる東京女子師範学校附属幼稚園の影響力はあまりに大きく、結果として幼児教育・

保育の発展に関わるその他の要因を過小評価することにつながっているという指摘まである。日本保育学会編(1968a)は、当時ほぼ唯一の幼児教育・保育史であった倉橋・新庄(1934)について、「東京女子師範学校附属幼稚園を中心とした沿革史的要素が強く、全国的な幼稚園の客観的資料に基づく発展史は殆ど皆無であった」〔日本保育学会編 1968:3〕と指摘している。また柴崎正行は東京女子師範学校附属幼稚園があまりに知られすぎているため、「わが国の幼稚園教育の施設がすべてこの幼稚園を模範にして造られたかのように思われている」〔柴崎 1995:175〕ことを批判し、他にも多様なルーツが存在したことを示している。

幼稚園関係資料・史料の充実に対し、保育所関連史料の不足はいかんともしがたく、倉橋・新庄(1934)を批判した日本保育学会でさえ克服することは難しかった。日本「保育」学会の日本「幼児保育」史であるにもかかわらず、明治大正期にあたる第1～3巻が取り上げた施設の多くは幼稚園である。

先述の新潟静修学校<sup>4)</sup>や、初の季節保育所といわれる箕雄平の農繁期託児所、大都市の工場内に併設されたという工場託児所などはいずれも資料が限られており、知名度に反して不明な部分が多い<sup>5)</sup>。この時期の保育所で資料が充実しているのは二葉幼稚園(保育園)くらいであり、結果として先行研究の多くは二葉の実践や野口幽香、徳永恕の紹介に多くの紙幅をさいている。

資料の制約という問題は、もう一つの大きな問題を生み出している。資料や先行研究が充実している東京や大阪などの大都市を中心に歴史が編まれ、地方史が著しく弱くなるということである。本稿の問題意識もここにある。以下、これまでに紹介した先行研究でほとんど触れられることのなかった北海道、札幌の幼児教育・保育史について見ていこう。

## (2)札幌と北海道の幼児教育・保育史研究

札幌と北海道の幼児教育・保育の歴史については、まず公的な資料として札幌市教育委員会編(1991、1994、1997)などの地域史、北海道立教育研究所編(1955～)、北海道私学教育史編集委員会編(1963)、石狩教育史編集委員会編(1980)、山崎長吉(1986、1992、1997)<sup>6)</sup>などの教育史が挙げられる。

これらはいずれも豊富な資料と統計を収録しており、札幌や北海道の幼児教育・保育の歴史を知るうえで貴重な資料である。一方で公的サイドからの記録であるため、政策や制度に対する批判的な視点が欠けている、教育の中でも初等教育、中等教育、高等教育を中心に編まれており、幼児教育・保育に関する記述が少ないといった課題を抱えている。

そして、やはり北海道や札幌においても、保育所の公的な通史は存在しない。先に挙げた公的教育史の多く

は、本来教育機関ではない保育所についても記述をしている。しかし、その内容は充実したものとは言い難い。また『新札幌市史』も保育所の記述は幼稚園に比べて極端に少なく、特に戦前期にいたってはわずかなものしかない。『新札幌市史』のデジタルアーカイブで「託児所」「保育所」「幼稚園」で検索してみると、戦前において「幼稚園」は50件ヒットするのに対し、「託児所」は3件、「保育所」でも4件しかヒットしない。

このような状況の中、札幌の保育所の歴史を伝えているのは何人かの研究者と、保育所の園史である。特に札幌初の保育所とされる札幌保育園の園史(札幌保育園1992)は札幌、北海道における他の保育所の歴史にも言及があり貴重な資料となっている。また、その他に幼児教育・保育の歴史をまとめたものとして、札幌保育園創設者大石スクの孫であり同園長でもあった大石徹(1995)や、坂本道子(2001)、明治期の幼稚園に注目した松浦映子(2012)などが挙げられる。

これらを参考とし、次節以降では札幌の幼児教育・保育の概略を整理していきたい。まずは北海道と札幌の幼稚園の歴史を概観する<sup>7)</sup>。

## 2. 明治・大正時代の幼稚園

### (1)幼稚園史概略

1872(明治5)年に発布された「学制」では、第21条、第22条に、6歳までの子どもに小学校に入る前の端緒を教えるための施設として幼稚小学が構想されていた。しかし、幼稚小学は学制の混乱と明治政府や地方の財政難により作られることはなかった。

実際の幼児教育・保育制度のルーツとしては、先述した1871(明治4)年の亜米利加婦人教授所(横浜)や1875(明治8)年の幼稚園(京都)、やはり京都で柳池小学校に併設された幼稚園遊嬉場などが候補に挙げられる(文部省1969、1979、文部科学省2022)。また、実在が確認されていないものとして1873(明治6)年頃、京都で外国人による鴨東幼稚園が(日本保育学会編1968a:56)、また愛知師範学校に伊沢修二によって名称不明の「幼稚園に類似した」〔日本保育学会編1968a:58〕施設が作られていたという。これらについてはいずれも資料が少なく、その実態は明らかでない。また、いずれの施設も短命であり、その他の施設へと広がりを見せることはなかった。

そのうえで、1876(明治9)年に開園した東京女子師範学校附属幼稚園を日本の幼稚園、幼児教育のルーツとすることには説得力がある。初めて文部省により設置され、その後の幼稚園拡大のモデルとなった施設だからである。1879(明治12)年に日本で2番目の幼稚園として開園した鹿児島女子師範学校附属幼稚園は、準備にあたり日本人初の保姆である豊田美雄を招き、東京女子師範



学校附属幼稚園の実践を学んだ。豊田美雄は保姆の心得や幼稚園の何たるかをまとめた『保育の栞』を著すことでも拡大する幼稚園に影響を残すこととなった。また、同年仙台に設置された日本で4番目の幼稚園となる木町通小学校附属幼稚園も、仙台師範学校の卒業生を東京女子師範学校附属幼稚園に派遣し保育法を学ばせた。1899(明治32)年に文部省令「幼稚園保育及設備規程」ができるまで「東京女子師範学校附属幼稚園規則」が幼稚園の事実上の基準となっていたことから、この幼稚園の影響が絶大であることがわかる。

東京女子師範学校附属幼稚園の開設により幼稚園設置の気風が全国的に醸成されると、1880(明治13)年には北海道でも幼稚園設置の動きがあらわれた。函館では幼稚園設置の構想がだされたが、「人を得られず」〔前村2015:263〕断念した。札幌では大書記官・調所広文が農業博覧会終了後の施設を利用し幼稚園を設置しようとし、上京までしたが「時期尚早で」〔山崎1986:146〕失敗に終わった。

1882(明治15)年になると、文部省学事諮問会が簡易幼稚園の普及を奨励する方針を示した。また、1883(明治16)年には文部省が府県学務課長会議を招集し、幼稚園設置と条件整備について指示を出した(山崎1986:146)。これにより幼稚園設置の動きは加速する。

まず幼稚園を実現したのは、札幌よりも函館であった。1883(明治16)年、函館県は北海道初の幼稚園に関する規則「学校幼稚園書籍館規則」を制定した(北海道私学教育史編集委員会編1963:153)。11月1日には、函館師範学校に北海道初となる附属仮幼稚園が開園し、25人の子どもたちが通った。開園に際しては桜井女学校の創設者である桜井ちかと、東京女子師範学校附属保姆練習科を修了後、同附属幼稚園に勤務していた武藤やち(八千)が尽力した(前村2015:263)。この幼稚園は1886(明治19)年に函館師範学校が改組のため廃止されたこととともない、1887(明治20)年に廃止される。同年、素木岫雲が附属幼稚園跡地に私立函館幼稚園を開園。函館師範学校附属幼稚園に引き続き武藤やちが子どもたちの保育にあたった。

素木岫雲の函館幼稚園は翌1888(明治21)年6月には廃園となってしまふ(北海道私学教育史編集委員会編1963:155)。しかし、武藤やちが中心となって同年函館幼稚園(素木の函館幼稚園とは別組織)を開園、園舎の火災焼失などを乗り越え1903(明治36)年まで存続した。経営は終始苦しかったそうであるが、毎年100人前後の子どもが在籍していたという<sup>8)</sup>。また、1895(明治28)年には、北海道では現存する最古の幼稚園である遺愛幼稚園が開園し、函館の幼稚園教育を軌道に乗せていった(北海道私学教育史編集委員会編1963:155)。

## (2)札幌の幼稚園史

函館から遅れること5年、1888(明治21)年4月に札幌にも幼稚園が開園した。アメリカ合衆国出身で長老派伝道教会の宣教師であったサラ・クララ・スミスがつくり、長谷部マン(万)が教師となったスミス女塾附属幼稚園である<sup>9)</sup>。スミス女塾は当初、スミス個人の資金によって運営されていた。1888(明治21)年になると長老派伝道教会から250円の資金援助があり、これによって幼稚園の園舎がつくられた(北海道私学教育史編集委員会編1963:555)。スミス女塾は1889(明治22)年に北海道庁から各種学校としての認可を受けスミス女学校と改称、のち1894(明治27)年には北星女学校と改名した。しかし1894(明治27)年に学校を北4条西1丁目へと移転した際、経営難もあって附属幼稚園は廃園となっている(山崎1986:225)。

スミス女塾附属幼稚園の正式認可から遅れること4ヵ月、1888(明治21)年8月には札幌区によって創成小学校附属幼稚園が開園する。札幌で2番目の幼稚園であり初の公立幼稚園である。教師として松前出身で東京女子師範学校に学んだ西川かめが招聘された(松浦2012)。

創成小学校附属幼稚園は1892(明治25)年5月4日に起きた札幌大火により焼失する。それに伴い、附属幼稚園は札幌女子小学校へと移管された(山崎1986:226)。1898(明治31)年に札幌女子小学校が生徒増加により教室不足に陥ると、附属幼稚園は廃園となり園舎は第2裁縫室へ転用されることとなった。背景には幼稚園教育が区民に浸透しなかったこともあったという。札幌女子小学校長・小林到は私立幼稚園の新設を附属幼稚園廃止の条件としたが、その後5年間は札幌市域に幼稚園がない空白期となる。札幌市域の公立幼稚園ということでは、1952(昭和27)年<sup>10)</sup>設立の星置幼稚園が1954(昭和29)年に手稲町へと移管され町立手稲西幼稚園(後に手稲中央幼稚園に改称)となるまで、「札幌」という自治体でいえば手稲町が札幌市に編入されて「札幌市立手稲中央幼稚園」となる1967(昭和42)年まで、実に半世紀以上、70年近くにわたって「公立幼稚園空白時代」が続くこととなる。

札幌に幼稚園が再び作られるのは1903(明治36)年のことであった。この年、安田貞謹が、自らが校主を務める私立育成尋常高等小学校に附属幼稚園を設置した。しかし翌1904(明治37)年1月<sup>11)</sup>には小学校の火災により附属幼稚園も類焼、閉園となった(札幌市教育委員会編1997:903)。

次にできたのは村木啓作(継策)が北7条西7丁目に設立した私立札幌幼稚園である。1907(明治40)年に認可され、1908(明治41)年6月に開園した。当初18人の園児でスタートしたものの、12月には8人まで減少し休園することとなった。しかし、塚本正賢が村木の幼稚園を引き継いで1909(明治42)年4月に札幌幼稚園を再

開<sup>12)</sup>すると、9月には北2条西2丁目へ移転した（札幌市教育委員会編1997：903）。札幌幼稚園の園児は徐々に増えていき、経営も安定していった。1910（明治43）年4月には札幌幼稚園から名称を私立若葉幼稚園へと改称し、戦前の札幌を代表する幼稚園として「幼児教育の中枢的位置を占めた」〔札幌市教育委員会編1997：905〕。

1910（明治43）年には北1条南4丁目<sup>13)</sup>に聖公会幼稚園が開設された。これは英国聖公会海外伝道会によるものであり、北海道地方部監督のアンデレスにより申請され、設置者はアイヌ教育で名高いジョン・パチェラー、園長は婦人宣教師ノートンであった。パチェラーと聖公会がかかわっていることからわかるように、聖公会幼稚園では「旧土人」、つまりアイヌの幼児も対象であった（北海道私学教育史編集委員会編1963：270）。

大正時代に入り、1914（大正3）年には二葉幼稚園が開園した。ただこれは翌1915（大正4）年頃には閉園したとみられ、詳細はわかっていない。

1919（大正8）年、大通西1丁目に札幌組合基督教会学校附属幼稚園が開園した。これは札幌組合基督教会（後の日本基督教団札幌北光教会）が設置したものであり、1922（大正11）年には北光幼稚園へと改称した（札幌市教育委員会編1987：142-3）。北光幼稚園は後に白石区に移転し、札幌市で現存する最も古い幼稚園となっている。

明治・大正期の札幌市域には、表に見られる11の幼稚園

園が作られた。そのうち、2023年現在も運営を続けているのは北光幼稚園のほか、桑園幼稚園（1923（大正12）年開園）、山鼻幼稚園（1925（大正14）年、現在の札幌大谷幼稚園）である。

戦前の札幌市の幼稚園については、いくつか目立った特徴がある。

第一に、そのほとんどが民間によって作られている。昭和初期まで視野を広げても、札幌に作られた17園のうち公立は創成小学校附属幼稚園だけである。東京女子師範学校附属幼稚園を皮切りに、全国に作られていった初期の幼稚園が師範学校や小学校の附属として作られた公立中心だったことは大いに異なる。その背景には明治の北海道における深刻な財政難や幼稚園自体への理解不足があった。初期の幼稚園の多くが1年から数年、長いものでも10年前後で閉園を余儀なくされているが、その理由は財政難、園児不足が主だったという。第二次世界大戦終戦後、学校制度が新たにスタートした後も、札幌では小学校を中心とした義務教育の整備が優先され幼稚園政策は遅れをみせた。札幌における公的サイドの幼児教育軽視については、踏み込んだ研究が必要となるだろう。また、個人の篤志家が設立した幼稚園については、史料の制約から不明な点が多く、今後のさらなる調査研究を必要とする。

第二に、一点目とも関連して、宗教、特にキリスト教会の動きが目立つ。スミス女学校のほか、聖公会幼稚園、

表 明治・大正期の札幌市域幼稚園一覧

名称	所在地	開園	閉園	設置者	備考
函館師範学校附属小学校仮設幼稚園	函館	1883	1887	公立	
函館幼稚園	函館	1887	1888	素木岫雲	
函館幼稚園	函館	1888	1903	武藤やち	
遺愛幼稚園	函館	1895	—	メソジスト伝道教会	現存する北海道最古の幼稚園
スミス女学校附属幼稚園	北1西6	1888	1894	米長老派教会	
創成小学校附属幼稚園 →札幌女子小学校附属幼稚園	北1西3 →北1西4	1888	1898	公立	移転を数度。札幌初の公立幼稚園。
育成尋常高等小学校附属幼稚園	南3西5	1903	1904	安田貞謹	
札幌幼稚園	北7西7	1908	1909	村木啓作（継策）	
札幌幼稚園 →若葉幼稚園	北7西7 →北2西2	1909	1945？	塚本正賢	
聖公会幼稚園	北1西4？ 南2西7？	1910	1919？	聖公会	札幌聖公会ではなく英国聖公会海外伝道会設置。
二葉幼稚園	北7西6	1914	1915	柴田長尾	
札幌組合基督教会学校附属幼稚園 →北光幼稚園	大通西1	1919	—	組合教会	現存する札幌最古の幼稚園
桑園幼稚園	北7西13	1923	—	札幌日本基督教会	1931年に一時閉園。1935年再開。
山鼻幼稚園 →札幌大谷幼稚園	南7西8	1925	—	東本願寺派	
札幌幼稚園	南10西13	1926	不明	鈴木又衛	鈴木木の死後廃園。



北光幼稚園、桑園幼稚園がキリスト教関係者によって作られた。キリスト教が幼児教育の普及に果たした役割については札幌市教育委員会編（1987）などでも注目されている。この影響は昭和に入ってから続いた。キリスト教会の影響は単に量的なものではなかった。初期の幼稚園のほとんどが札幌中心部に作られていた中でキリスト教の幼稚園は郊外にも展開し、幼児教育拡大に一役買った。これは偶然の結果ではなく、キリスト教系の各幼稚園が「意図的におこなったもの」〔札幌市教育委員会編 1987：147〕であるという。

### 3. 明治期札幌における保育所の歴史

先述のとおり幼稚園にも増して保育所の歴史に関する資料・史料は少ない。特に明治・大正期の保育所に関してはほとんど記録に残っておらず前節の幼稚園の歴史のように保育所の創立や休廃園の記録を時系列で記述することは困難である。そのため本稿では現時点で札幌の保育所の歴史をまとめるには先に触れた札幌保育園（1992）に依拠せざるをえないと判断した。それは札幌で最も長い歴史を持つと言われている札幌保育園（現在の認定こども園さっぽろこども園）が創立70年を記念して刊行した園史である。当時の新聞記事をふんだんに使用して構成されており、一園史でありながら、当時の札幌における保育所の位置づけを垣間見ることができる貴重な史料となっている。また当時の園長だった大石徹は、園史編纂作業の過程で収集された資料を基に戦前札幌の保育所の歴史を大石（1995）にまとめており、こちらも貴重な情報が掲載されている。ただし、当然のことだがこれらは札幌保育園創立以前の状況についての記述は限定的である。また全体として札幌保育園を中心に整理されたものとなっていることは否めない。そこで以降では大石らの議論に依拠しつつ、明治・大正期の札幌でみられた保育所設置の動きを当時の社会状況との関連を意識しながら確認する。やや先取りして言うと大石（1995）は大正末期まで札幌に保育所は存在しなかったとしている。したがってここでは大石のこの指摘を検証することを試みたい。まずは明治期の状況からみていこう。

#### (1) 庁立札幌高等女学校に附設された子守教場

日本の保育所の嚆矢の一つとして子守学校が挙げられる場合が多い<sup>14)</sup>が、札幌にも子守学校は存在していたのだろうか。1901（明治34）年7月号の『北海道教育雑誌』に「子守学校設置」という見出しで次の文章が掲載されている。

「札幌区にては人口の増殖に伴ひ學齡児童もまた年々増加し來り到底既設學校のみにては収容なし能はざるを以て早晚二ヶ尋常小學校の増設あるべき筈

なることは既に本紙の度々報道なしたる如くなるが此外にも是非一個の子守學校設置の必要ありとて當局に於ては兼て夫々調査中の由今其理由とする所を聞くに區内不就學児童の多くは女兒にして貧窮の爲め子守に従事なしつゝあるを見て其儘になし置くは甚だ遺憾とする所なり是れ等をして多少の教育を得せしめんとするには子守學校設置の外他に良途なかるべきと云ふにありといふ」〔北海道教育會 1901：91-92〕

ここからは当時の札幌で、児童（特に女兒）の不就学の問題が子守によるものと認識されていたことがわかる。そして同時に、その時点で札幌には子守学校は存在していなかったことも読み取れるだろう。この後しばらく『北海道教育雑誌』に子守学校に関する記事は見られず、次に出てくるのは1904（明治37）年5月号である。「子守教場新設」との見出しで「庁立高等女学校にては今回同校附属として子守教場を新設し五月一日より開始す。その規則は左の如し」と書かれており、全12条の学則が記載されている（北海道教育會 1904：23）。おそらくこれが札幌で最初の子守学校であると思われる。ただこの後の情報が全く見当たらない。庁立札幌高等女学校の学校史などを紐解いても子守教場開設との記述はあるが、それが具体的に学校内のどこで行われ、どのような教育がされていたのかを示す資料はなく、実際に託児のようなことが行われていたのかも不明である。また、多くの子守学校が義務教育段階の学齡児を対象とした私塾や公立小学校に附設されていたのに対して、なぜ札幌では官立の高等女学校であったのかという経緯についても不明である。大石（1995）でもその存在については触れているが「いつ頃まで続いていたのかあまり正確なことは分からない」〔大石 1995：3〕としている。

#### (2) 製麻工場における託児所の存在をめぐって

明治期日本の近代化を支えた産業は製糸、紡績といった繊維産業であったが、それは多くの女性工員（女工）によって成り立っていた。多くの先行研究では女工確保の方策として紡績業の分野では早い段階から工場内に託児所がつくられていたことが指摘されている。北海道においても1887（明治20）年には大規模な製麻工場（北海道製麻会社）が設立されていた。しかし大石（1995）は、明治期における工場託児所の存在について否定的で「全道的にも札幌区でもその開設を示唆するような資料は見当たらない」〔大石 1995：4〕と述べている。たしかに北海道製麻会社設立の初期は、女工の多くは道外の地方から前借金を抱えてやってきた年少者が多く、家族持ちの女工は少なかったようである。また、その労働条件は非常に劣悪で、体調を崩しても前借金を返済するまで退職も認められないというまさに“女工哀史”の世界が展開されていた<sup>15)</sup>。製麻会社の悪評は世間にも知られており新

聞等でもしばしば報道されている。例えば当時の新聞には「製麻會社の職工虐待」という見出しで次のような記事がある。

「全會社の職工を虐待することは今に始まりし事に  
あらず、時々聞くに忍びざる惨話を耳にすることあり、  
種々甘言をもって内地府縣及び此地にて募集せる  
職工に対し約束の給金も種々の名義にてその半ば  
を刎ね去り、病傷等の場合には死ねよかし斃れよか  
しに取り扱うなどその内幕は言語全断の始末…」〔北  
海道毎日新聞 1897（明治 30）年 4 月 9 日〕

このような状況で会社が託児所を用意していたという  
ことは考えにくいかもしれない。ただ、その後の吸収合  
併等により北海道製麻会社から北海道製麻（株）を経て  
1907（明治 40）年に帝国製麻（株）となると工場労働者、  
特に女子、年少労働者の保護を求める世論も次第に活発  
となり、工場法制定に向けた機運も高まっていた。また、  
女工の属性も前借金のない志願職工の“自由労働者”が増  
え、道外からの寄宿舎暮らしから自宅通勤が半数以上に  
なったという（札幌市教育委員会編 1994：430-1）。この  
頃あたりから家族持ちの女工が増えてきたのではないだ  
ろうか。会社側も工場法を意識することだけでなく職工  
の安定的な確保と工場定着化などを図るため福利厚生を  
充実させるべく様々な取り組みを始める。例えば帝国製  
麻札幌支店の連載を掲載した新聞記事には次のような記  
述がある。

「而して職工にして幼児を携帯するものは工場構内  
に一室を割して乳児は揺籃に其他は婦女監督の下に  
遊戲せしめ休業時間に其母をして見舞はしむること、  
せり是等の幼児は長するに随ひ父母の出勤時間  
と共に遊戲室に入り就業後相携へて寄宿舎に帰るの  
慣習となり自然會社状況に通するより之を養成して  
良職工たらしめ子々孫々會社の爲めに盡さしめんと  
するは之れ會社の理想とする處なりとか」〔北海タ  
イムス 1909（明治 42）年 4 月 13 日〕

あるいはさらに以前から製麻工場に託児所が設置され  
ていたことを示す資料もある。出典が十分明らかではな  
いが、「日清戦争」との記述から明治中期の北海道製麻  
（株）時代のことと推測できるが、以下のような記述がみ  
られる。

「亜麻製品は軍需品であるから、日清戦争中にはも  
っとも好評で工員の欠乏に苦しんだ。このため地元か  
ら子持ち女も採用し、保母も配置したうえ、稼働時  
間も短縮した。戦争景気がおさまると工場は不況  
で、工員を減らし、逆に労働を強化した」（札幌市刊  
行の「札幌のあゆみ」）<sup>16)</sup>

もちろんこの資料のみで大石（1995）の議論を反証し  
たことにはならないが、少なくとも札幌で最初の工場託  
児所の登場はいつなのかという点について、あらためて  
検討する必要があると思われる。

### (3)日露戦争下で検討されていた幼児保育所設置構想

子守教場の設置と同じ年である 1904（明治 37）年には  
日露戦争が始まっている。そしてそれを契機として、軍  
人遺家族のための臨時的な保育所が全国各地で生まれて  
いるが、北海道においては 1905（明治 38）年 7 月に道庁  
による訓令（明治 38 年第 75 号）で保育所の開設を奨励  
している。それを受けて北海道で最初に保育所が設置さ  
れたのは函館であった。同年 11 月に函館慈恵院（現函  
館厚生院）によって「幼児保育所」が開設し、帝国軍人  
援護会から多額の助成金を受けている記録がある<sup>17)</sup>。そ  
してほぼ同時期に札幌でも保育所設置の動きが始まって  
いる。主に役割を担っていたのは出征軍人遺家族の援護  
団体である札幌区奉公義会であった。大石（1995）によ  
れば、札幌区奉公義会は 1905（明治 38）年 9 月 1 日には  
総会を開催して「一、札幌奉公義会幼児保育所規則案  
二、本年度収支予算案」を可決し、開設場所も札幌区役  
所内に置くことが決まっていたという。しかし、こうし  
た動きは終戦とともに急速にしぶんでいく。その後新聞  
紙上で幼児保育所関連の記事は見当たらなくなり、「1906  
（明治 39）年に札幌奉公義会そのものの解散が取りざた  
されているので、開設は急きょ取りやめになったと思わ  
れる」〔大石 1995：3〕と述べている。

## 4. 大正期札幌における保育所の歴史

### (1)保育所設置の動きがみられない大正前期

1918（大正 7）年に起きた米騒動は全国各地に広が  
たとされているが、札幌で米騒動が起こったという記録  
はない。むしろ同年は開道 50 年にあたる年であり、札  
幌では 8 月に記念博覧会が開催されるなどお祭りムード  
が漂っていた。そうした博覧会景気も手伝って札幌区民  
は米価問題に対して比較的冷静に受け止められていたと  
されている<sup>18)</sup>。そのためであろうか、米騒動を契機とし  
た不安定化する社会状況に対応するため、1920（大正 9）  
年前後に全国各地の都市で公立の託児所が次々とつくら  
れているのに対して、札幌ではそのような動きは見られ  
なかった。大石（1995）も札幌保育園が誕生する 1922（大  
正 11）年までを「大正前期」と区切って、その期間は記  
録の上では保育所の開設はされておらず「空白の時代」  
が続いたとしている。

この点に関わってここで見ておきたいのは、農繁期に  
臨時的に設置される季節託児所の存在である。米騒動を  
きっかけに民衆の政治参加や自由を求める声が高まり、  
いわゆる大正デモクラシーが展開したが、それに伴って  
全国各地で労働争議や小作争議が頻発するようになる。  
そのような中で季節託児所は農繁期における児童保護と  
いう目的とともに、地主側にとっては小作人の不満をそ  
らして争議を減らす（そして農業生産性を向上させる）  
という目的で設置される側面もあった（渡邊 1998：



21-2)。実際のところ大正期以降、全国各地で地主と小作人の対立が激化するにしたがって全国の季節託児所数は増加している<sup>19)</sup>。

ところが札幌ではそのような状況は確認できない。大石（1995）は大正前期に札幌で季節託児所が「開設された様子はなさそうである」と述べ、都市部だけでなく農村部でも「空白の時代」であったことを指摘する。実際のところ当時の札幌は農民運動において遅れがあったようである。1913（大正2）年の北海道庁編『北海道農場調査』によれば、現在の札幌市域を構成する諸村に開設された農場は22とされている。そのうち自作経営を行っているのはわずか2農場であり、その他はすべて何らかの形で小作制に依拠しての農場経営であった（札幌市教育委員会編1994：441-2）。つまり当時の札幌近郊には相当数の小作人がいたことがうかがえるのである<sup>20)</sup>。しかしながら小作争議の件数は全国の動向と比較すると極端に少ない。北海道の農民運動が小作争議という形で北海道庁などの公式統計に出現するのは1920（大正9）年以降となる。北海道編（1957）によると1920（大正9）年から1926（大正15）年にかけての争議件数が全道で7件から15件の増加にとどまっております<sup>21)</sup>、『日本労働年鑑』に示されている同時期の全国の状況（408件から2751件）と比較すると件数も増加率もかなり少ないことがわかる。もちろん小作争議の件数と季節託児所の設置状況を軽々に相関させることはできないが、託児所設置も含めた農民たちの要求が明示されなかったことが「空白の時代」を生み出す要因の一つだった可能性はある。

## (2) 入所施設だった札幌保育園の誕生

札幌初の保育所と評される札幌保育園<sup>22)</sup>が大石スクによって開設されたのが1922（大正11）年とされている。ここまでみてきたように工場託児所についてはあらためて検討する必要はあるものの、現時点でそれ以前に明確に保育所の存在を示す資料はなかったことから、札幌保育園が札幌における保育所の第一号であるという説は有効だろう。

ところで札幌においては保育所とは別に児童対象の取り組みとして孤児院や感化事業、免囚保護事業などが明治期から展開しており、それらは慈善事業と呼ばれていた。有田正雄、小池九一、助川貞二郎といった著名な篤志家による熱心な活動が札幌でも見られていたのである。むろんこれは裏を返せば行政による当該児童らへの救済はほとんどなかったということでもある。しかし大正期になると劣悪な労働条件や生活困窮の状況が社会の問題であるとの認識がされるようになり、政府は民衆の声を無視できなくなる。1917（大正6）年になると内務省に救護課が設置され、1920（大正9）年に社会局に昇格する。慈善事業はこの頃あたりから社会事業と呼ばれるようになった。北海道庁が社会課を設置したのは

1921（大正10）年で、北海道慈善協会は同年に北海道社会事業協会に改称する。「空白の時代」を経て、スクが札幌初の保育所と言われる札幌保育園を札幌区南一条東四丁目に創設したのは翌年のことだった。

このように社会事業の文脈に並べて札幌保育園の登場を述べようとした理由は、札幌保育園は当初いわゆる通園型の保育事業ではなく、入所施設事業として始まっていたからである。スクの娘の妙子は開園当時の様子を次のように語っている。

「この時は乳児の収容保育です。今でいえば乳児院ですね。（中略）オバケ屋敷だといって誰も使わない家を無料で借りて、乳児を十人引き取って育てました。大きな家でした。刑務所に入っている人の子、私生児で困っている人の子、母親が病氣の子、ミルク代を僅かばかりもらっていましたが、ミルクのことがよくわからない。（中略）母は寄付を集めたり、外廻りの仕事が忙しいものですから、子供の世話私の仕事でした。母の希望は貧民街に入って働くということでした。」〔三吉1966：161-162〕

「収容保育」という言い方は聞き慣れないが、当時児童の収容施設というと孤児院が想起されていたことを考えるとそれとの差別化を図るべく作り出された言葉だと思われる。孤児院にも孤児ではない（のだが育児困難な世帯にいた）子どもはいたが、孤児ではなくかつ就学前の子どもに特化した入所施設というのは全国でも珍しかった。1922（大正11）年11月3日の開園式には北海道庁職員や札幌市会の議長だけでなく先述した有田正雄札幌育児院院長、小池九一立感化院院長も来賓として祝辞を述べるなど札幌保育園が新たな社会事業の担い手として期待されていたことがうかがえる。

しかし、この「収容保育」は実際に事業として行っていくには難しい面があったようである。札幌保育園の入所施設としての運営は半年も経たずに終了し、いわゆる昼間保育所の事業へと転換することになる。この件について札幌保育園（1992）は「この変更については、どのような理由であったのか資料等がないので正確なことは分らない。」〔札幌保育園1992：32〕としつつ、「いずれにせよ、結果的には本格的に保育事業を展開するための予備的な過程であったと云えそうである。」〔札幌保育園1992：33〕と述べ、入所施設としてスタートしたことの意味をそれ以上掘り下げることをしていない。

ここではあらためてなぜスクが最初に孤児ではない子どもたちの「収容保育」をはじめようとしたのかということについて考えたい。なぜならそこには札幌という街が持つ歴史的な課題が関係しているように思われたからである。例えば私生児の存在は明治20年代後半以降、札幌で問題視されてきた経緯があった。1897（明治30）年2月27日付北海道毎日新聞では北海道と全国の私生児数の比較をして、出生児数に占める私生児の割合が全



国よりも極めて高いことを明らかにした<sup>23)</sup>。また、1899（明治32）年11月2日付同紙では、札幌区内本籍者のうち私生児・庶子数の調査を掲載している。その数は956名にのぼり、特に薄野遊郭を含む商業エリア（南1条から南6条）で確認されたものが8割を超えていたとしている。しかもこれは本籍者のみの数字であるため、寄留者も加えるとさらにその何倍にもなることは間違いなく、私生児の問題が遊郭の存在とリンクしていることは容易に想像できることであった。

札幌と遊郭の歴史についてもここで簡単に確認しておこう。薄野遊郭は設置の段階から行政（開拓使）が深く関与し、「芸娼妓解放令」が公布されても札幌では官民を挙げて最後まで抵抗してきたという歴史がある。さらに開拓使は芸娼妓や貸座敷に関する規則類を制定して「職業」と公認し、いわゆる公娼制度を確立する。娼妓たちの過酷な生活はしばしば新聞等で悲哀話として取り上げられ、札幌でも廢娼論は唱えられてはいた。しかし芸娼妓が納める賦金（税金）の大きさ<sup>24)</sup>もあってその議論は深まることはなく、1917（大正6）年に札幌遊郭と改称して白石に移転されることが決まる。つまり「この時点での札幌の政財界や有識者たちは、残念なことに苦界に呻吟する女性を救済しうるために『公娼制度』そのものを廃止しようという廢娼論よりは、地方税の好財源として見逃せない遊郭を市街地のはずれに移転するといった存娼論を選択したのであった」〔札幌市教育委員会編1994：579〕。

遊郭が実際に移転をするのは1920（大正9）年であるが、その2年後に札幌保育園が登場することになる。スクがこうした問題を意識して札幌保育園を創設したのかはわからないが、ともかく孤児ではない要養護児童のための入所施設は当時の札幌で一定のニーズがあったことは間違いないだろう。事業自体は成功したとは言えなかったとはいえ、スクがこの問題にいち早く着手していたという点はもっと高く評価されてよいと思われる。

### (3) 通所保育事業として再スタートする札幌保育園

札幌保育園（1992）によると、開園から2か月を過ぎた頃には入所施設としての運営を見直していたらしく、「正月から二月にかけて預かっていた子供達を親元へ返し、本格的に保育事業に専念するための準備を具体化していった」とある〔札幌保育園1992：33〕。移転先である豊平町四番地は当時細民街<sup>25)</sup>と呼ばれた地域であった。娘妙子が述懐していた「母の希望は貧民街に入って働くことでした」にも叶う場所で札幌保育園は1923（大正12）年3月に「常設の、幼児を対象とする、昼間のみの、通所型の施設へと変わった訳である」〔札幌保育園1992：32〕。

札幌保育園の再スタートについては新聞各紙でも報じられている。例えば北海タイムスではスクの次のような

コメントを掲載している。

「園児の中にはずいぶん不幸なのもありますがわうわう境遇が子供の将来を運命づけるようなことを見聞きしたたびに私はどうかしてせめて自身の周囲の子供だけでもすなほに育てあげたいと思ひます、それから經濟のために可愛い可愛い子供の養護もつい心ならずにある方もたくさん御座います、近來これまで經濟的に無武装者であつた夫人がごんごん生活の闘士として家庭のそとに働かねばならなくなりましたので、多くの職業婦人中には子供のため思ふやうに活動出来ない方もおありだらうと思ひますのでさうした方々に心おきなく働いて貰ひたいと思ひまして小さながら託児事業をはじめた譯で御座います」〔札幌タイムス1923（大正12）年3月25日〕

また同年11月の小樽新聞には「“子供の愛に目ざめゆく親”札幌保育園を經營する大石スク女史の苦心」という見出しとともに次のような文章が記事に書かれている。

「先ず此の虐げられた幼き者を救はなければならぬ、子供が良くなればその愛に引かれて親達はひとりでに清められてゆくであろう」此の遠大なる理念と、強き確信とは女史を駆って敢然として其の残る生涯を保育の事業に投げうたしめる事となつた。

〔小樽新聞1923（大正12）年11月10日〕

ここからは適切な保育の提供による子育て支援ということだけでなく、親自身も矯正されていくことを狙った家庭教育的な視点も読み取れる。実際、札幌保育園では再開の数か月後に父兄らとの意思疎通を図るための懇談会を開催し、同年8月には保護者が組織されている。保護者会は園児増加に伴う園舎移転の際に相当の援助をしたことがうかがえる（札幌保育園1992：44-5）など、この頃には保護者からかなりの支持を獲得していたようである。また移転に伴って発生する費用の多くは寄付によって賄っていたという<sup>26)</sup>。つまり札幌保育園は単なる託児ではなく、子どもたちの保護者や地域の人たちも巻き込んだ保育分野の社会事業として展開していたということができよう。札幌保育園はその後園内給食の実施や女学校学生の保育実習の受け入れなど先駆的な取り組みを導入しており、戦前から戦後を通じて札幌の保育業界をリードする存在となっていた。

### (4) 札幌育児園付属苗穂託児所

札幌育児園は1906（明治39）年に創設された孤児院で、歴代の役員には札幌建設の中核的な働きをした人々<sup>27)</sup>が並んだ歴史のある施設である。その附属託児所は1926（大正15）年6月に北5条東7丁目に開設されたのだが、この地域は先の豊平町4丁目と同じく細民街と呼ばれていた。したがって貧しい労働者が多いこともあって施設の開設は喜ばれ、常時四、五十名の託児があった

という（札幌市社会事業協会編 1970：274）。当時の孤児院は孤児だけでなく貧児と呼ばれる生活困窮世帯の子どもを入所させていたため、札幌育児園が細民街で保育事業を行うということ自体はそれほど不自然なこととは思われない。しかし大石（1995）は「育児園は札幌保育園が誕生した翌十二年にすでに苗穂に託児所を設ける計画を進めていた。しかし様々な事情があり、十五年六月に開設された」〔大石 1995：11〕と述べ、設立の経緯をやや歯切れの悪い表現で記している。附属託児所をめぐっては札幌育児園の内部でも賛否があったということだろうか。1932（昭和7）年、この託児所は孤児院と経営上二分されるという理由で本願寺説教所に無料譲渡され開設から6年ほどで幕を閉じている。

## まとめ

本稿では、いくつかの公的史料や先行研究をもとに、明治期から大正期の札幌の幼稚園、保育所を中心とした幼児教育・保育施設の動きを追ってきた。引き続き検証が必要な点が多いが、一旦ここまでの議論を踏まえ、今後への展望をまとめておく。

まず、幼稚園については、第一に明治期の幼児教育において、札幌は必ずしも中心地でなかったことが示された。幼稚園設置は函館が先行し、またその他の地域にも、早い段階から幼稚園が設置されている。本稿ではまず札幌の幼児教育・保育史の骨子を描き出すことをめざしていたため、それらの施設にはほとんど触れなかったものの、函館をはじめとする北海道各地と、さらには北海道開拓の歴史的背景をも踏まえた描写が今後必要となってくる。

第二に、公立側の動きの遅さについては、議会や行政などの資料に踏み込みながら当時の動きをより明確に把握する必要性を痛感する。先述の通り、私学主導で幼稚園教育の整備がすすんだことは、札幌、そして北海道の大きな特徴といえる。特に札幌は、70年近くにわたる公立幼稚園不在の時代を経験している。市史や教育委員会編纂の教育史では、この時期になぜここまで行政が動かなかったのか、あるいは動けなかったのか、また、そもそも検討はなされていたのかといったことには触れられていない。

第三に、民間側の幼稚園設置に対する動きや意識が、現時点ではほとんど描写できなかった。札幌の幼稚園については公的資料への依存が多く、「政策サイドからの視点で行政等への批判的視点に欠ける」という先行研究への批判をまったく克服できていない。公的サイドが幼稚園設置への動きをほとんど見せなかった時期に、民衆は幼児教育をどのように捉え、何を求めていたのか。また、私立幼稚園を設置した人々や団体は何を目指していたのか。これらを明らかにできる資料を見つけることは

容易ではないが、そこを無視して多元的な歴史を描写することはできない。

北海道、札幌の幼稚園の歴史については、公的資料や、武藤やち、西川かめなど一部の偉大な先達をクローズアップした研究が存在するくらいで、手つかずの部分が非常に多い。先行研究を相互に結びつけながら、隙間を埋めていく作業が必要である。

保育所に関しては、一つは札幌には明治期にすでに工場託児所が存在していた可能性が高いということがわかった。先行する研究がこの点を検証できていないのであれば、まずはこの確認をすることが必要だろう。これは札幌の保育所のはじまりをどこに置くかという議論につながると思われる。ただし、札幌の保育の歴史を研究する上で、この作業がどのような意味を持つかということについてはあらためてここで確認しておきたい。先述のとおり汐見他（2017）は日本の保育の歴史を整理するにあたって、幼稚園の対になるものを「保育所的保育施設」と呼んでいるが、その理由を次のように述べている。

戦前期の保育所的保育施設には、「保育」を大切にしたもの、「託児」さえすれば十分というものもあり、内容に幅があった。これらを「託児所」という呼称でひとくくりにすることは、保育所及び保育所的保育施設の歴史についての正しい理解のさまたげになることが危惧される。〔汐見他 2017：3〕

当時の繊維・紡績工場における託児所設置の意図は、安価な労働力である女工をいかに確保するかというものであったことは否めない。本稿で確認した北海道製麻（株）のような工場法制定以前の明治中期の労働環境を考えれば、当該託児所の存在は乳幼児保護や子育て世帯の就労支援といった視点で捉えられるものではなかったであろうことは想像に難くない。つまりより重要なのは、札幌で最初の工場託児所の存在を確認したとして、それをどう評価するかということである。工場託児所が担ってきた役割はなんだったのかという問いは保育の歴史研究としてまだ十分な検討がされていない<sup>28)</sup>。

第二に、今回の作業から見えてきたのは、「子守」「女工」「芸娼妓」といったいわば社会の底辺で暮らす女性と保育との関連性である。遊郭の存在が札幌という街の成り立ちと歴史的に深いかわりがあることは先に触れたが、それは言い換えれば芸娼妓ら女性の犠牲の上に札幌の発展があったということでもある。これは子守や女工でも同じ構図として捉えることができよう。このことはジェンダーの視点で札幌の歴史を捉え直す必要性を示唆する。保育所がそこでどのような役割を果たしていたのか、あらためて検証される必要があろう。

三つ目は上記二つに関連するのだが、保育の歴史を明らかにするためには、あらためて保育所が担わされてきた役割を歴史の負の側面とともに考える視点が必要だということである。日本は明治以降の近代化の過程で資本



主義経済体制を導入し、その諸矛盾が庶民の生活に大きな影響を及ぼしてきた。特に札幌は開拓使による急激な近代化を経てきたこともあり、その影響はより大きいものがあったと思われる。前節で登場した札幌保育園、札幌育児園付属苗穂託児所が細民街でスタートしたという事実はそれを如実に物語っているといえよう。あるいは日露戦争下で設置が構想された幼児保育所は、戦争遂行を背景にした国民意識の統合や治安維持対策として利用された側面が強かったと思われる。これはその後の昭和戦中期にも保育所が担わされ続けた役割だった。

「保育」が果たしてきた役割はその時の時代ごとの社会的な背景を色濃く反映しているが、本研究ではそれに加えて地域の特性も加味して検討する必要があると考えた。今後もこのことを意識しながら札幌と保育の歴史について研究を続けていく所存である。

### ○参考文献

- 石狩教育史編纂委員会編（1980）『石狩教育史』石狩教育研究所。  
 一番ヶ瀬康子・泉順・小川信子・宍戸健夫（1962）『日本の保育』生活科学調査会。  
 大石徹（1995）「札幌の保育所—終戦時までの札幌市内保育所の足取り—」『新札幌市史』機関誌第28号：1-19。  
 大原社会問題研究所編（1967）『日本労働年鑑』法政大学出版局。  
 岡部茂（1970）「寛雄平について（三）」『幼児の教育』69-6：65-72。  
 上笠一郎・山崎朋子（1965）『日本の幼稚園』理論社。  
 ———（1974）『日本の幼稚園 新装版』理論社。  
 倉橋惣三・新庄よし子（1934）『日本幼稚園史』東洋図書（復刻版 倉橋・新庄（1983）『日本幼稚園史』臨川書店）。  
 坂本道子（2001）「札幌の保育事業史—『札幌保育園』の創業者大石スクと娘妙子・嫁日出の実践を通して—」『北方圏生活福祉研究所年報』第7巻：45-57。  
 桜井慶一（1989）『現代地域保育制度の研究—現状と課題—』相川書房。  
 札幌市教育委員会編（1987）『札幌とキリスト教』札幌市。  
 ———（1991）『新札幌市史 第2巻通史2』札幌市。  
 ———（1994）『新札幌市史 第3巻通史3』札幌市。  
 ———（1997）『新札幌市史 第4巻通史4』札幌市。  
 札幌市教育委員会文化資料室（1987）『札幌とキリスト教』札幌市。  
 札幌市社会事業協会編（1970）『札幌市社会事業のおいたち』。  
 札幌保育園（1992）『札幌保育園 70年の歩み』札幌保育園。  
 汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子（2017）『日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史 150年』萌文書林。  
 宍戸健夫（2014）『日本における保育園の誕生—子どもたちの貧困に挑んだ人びと』新読書社。  
 柴崎正行（1995）「東京における幼児教育施設の設立過程」『東京家政大学研究紀要』第35集(1)：175-82。

- 勅使千鶴（1981）「第二章 大正・昭和前期の保育」浦辺史・宍戸健夫・村山祐一編『保育の歴史』青木書店：40-85。  
 日本保育学会編（1968a）『日本幼児保育史 第一巻』フレーベル館。  
 ———（1968b）『日本幼児保育史 第二巻』フレーベル館。  
 ———（1969）『日本幼児保育史 第三巻』フレーベル館。  
 ———（1971）『日本幼児保育史 第四巻』フレーベル館。  
 ———（1974）『日本幼児保育史 第五巻』フレーベル館。  
 ———（1975）『日本幼児保育史 第六巻』フレーベル館。  
 古木弘造（1949）『幼児保育史』巖松堂書店。  
 北海道編（1957）『北海道農地改革史』（上巻）。  
 北海道教育會（1901）『北海道教育雑誌』第102号（復刻版編集委員会監修（1985）『北海道教育雑誌』第11巻下 文化評論社）。  
 北海道教育會（1904）『北海道教育雑誌』第136号（復刻版編集委員会監修（1985）『北海道教育雑誌』第14巻上 文化評論社）。  
 北海道私学教育史編集委員会編（1963）『北海道私学教育史』北海道私学協会。  
 北海道立教育研究所編（1955）『北海道教育史』北海道教育委員会。  
 前村晃（2015）『豊田美雄と同時代の保育者たち』三恵社。  
 松浦映子（2012）「北海道における明治期の幼児教育—札幌の公立幼稚園教師「西川かめ」の生涯から—」『藤女子大学紀要』第49号第Ⅱ部：195-201。  
 三吉明（1966）『ひらけゆく大事の蔭に 北海道社会事業の歴史・北海道 100年記念出版』図譜新社。  
 文部科学省（2022）『学制百五十年史』ぎょうせい。  
 文部省（1969）『幼稚園教育九十年史』ひかりのくに昭和出版。  
 ———（1979）『幼稚園教育百年史』ひかりのくに。  
 山崎長吉（1986）『札幌教育史 上』第一法規出版。  
 ———（1992）『札幌教育史 中』第一法規出版。  
 ———（1997）『札幌教育史 下』第一法規出版。  
 読売新聞北海道支社編（1979）『語りつぐほっかいどう 100年（2）』太陽。  
 渡邊洋子（1998）「女性の労働と子育ての社会的基盤に関する史的研究(1)—農村季節託児所の発達経緯と新潟県における地域的取り組みの動向—」『暁星論叢』43：19-44。

### 注釈

- 1) 本作は倉橋惣三著ということもあって内容が無批判に受け入れられてきたための弊害を生んだという指摘もされている。例えば東京女子師範学校附属幼稚園初代監事の関信三は1879(明治12)年に死亡しているが、本作に「明治十三年」〔倉橋・新庄1983：340〕と記されたためこれが通説になってしまったという（前村2015：106）。
- 2) 内務省「本邦社会事業概要」にはすでに「我邦に於ける幼児保育事業の始めは、明治二十五年（筆者注：後に「23年」に修正）新潟市静修学校内に於て貧困者の幼児の保育を開始したるもの之なり」と記載されていたという（日本保育学会編1968b：114）。
- 3) 「新潟静修学校で子どもたちのために妻のナカが授業中保育をした」とするのが定説だが、孫の赤沢美治氏によると鍾美とナカが結婚したのは1895(明治28)年であり、

- 1890（明治23）年にナカが保育を始めたとは考えられないという（汐見他2017：99）。
- 4）1964（昭和39）年の新潟地震で多くの資料が失われてしまったという（汐見他2017：99）。
- 5）例えば農繁期託児所は、子ども好きの尼僧円隋が農繁期に子どもの面倒を見ていたのがきっかけとされているが、そもそも円隋は男性だったという説もある（岡部茂1970：68）。また箕雄平が事業を受け継いだ年も1890（明治23）年説、1887（明治20）年説がある（汐見他2017：124）。
- 6）著者の山崎長吉は北海道立教育研究所で『北海道教育史』などの編集に携わり、『新札幌市史』編集長である高倉新一郎をして「北海道教育史の生き字引」〔山崎1986：2〕と言わしめた。『札幌教育史』は高倉新一郎が序文を寄稿、札幌市史編集員をはじめ各資料館、文書館、図書館等がバックアップするなど（山崎1986：3-4）、「公」に近いものといえる。
- 7）「北海道」で歴史を辿るならば、先住民族であるアイヌの人々がおこなっていた子育て、保育のあり方から論を始めるのが筋であろう。しかしここでは現在に至る幼児教育・保育のルーツを探るという観点からその対象を明治以降に限定し、それ以前の歴史については今後の課題としたい。
- 8）「函館市史」[http://archives.c.fun.ac.jp/hakodateshishi/tsuusetsu\\_02/shishi\\_04-10/shishi\\_04-10-02-04-02.htm](http://archives.c.fun.ac.jp/hakodateshishi/tsuusetsu_02/shishi_04-10/shishi_04-10-02-04-02.htm)（2023年1月10日確認）
- 9）スミス女塾附属幼稚園について、札幌市教育委員会編（1987：140、1991：830）は1887（明治20）年を、北海道私学教育史編集委員会編（1963：155）は1889（明治21）年を開園年としている。北星学園大学のホームページには「1887（明治20）年 北1西6に女学校・幼稚園を開設」（<https://www.hokusei.ac.jp/about/history/>）とあるが、「スミス先生日記」では1888年に「This year a Kindergarten is added to the school」とある（[https://houjin.hokusei.ac.jp/50th\\_history/02/pdf/hokusei\\_50th\\_2\\_2\\_3\\_1888.pdf](https://houjin.hokusei.ac.jp/50th_history/02/pdf/hokusei_50th_2_2_3_1888.pdf)）。札幌市教育委員会編（1987：140-1）によると、1887（明治20）年に作られた幼稚部が翌年、正式に認可されたという。
- 10）山崎（1997：378）では1948（昭和23）年設立。
- 11）ただし、『新札幌市史』の年表編では1903（明治36）年12月に焼失したこととなっている。
- 12）札幌市教育委員会編では「塚本は（筆者注：明治）41年4月に「区有志の声援に依って」同幼稚園を再開した」〔1997：903〕となっているが「明治42年」の誤植であろう。『新札幌市史』の年表では明治42年となっている。
- 13）札幌市教育委員会編（1987：142）による。札幌市教育委員会編（1997：905）では南2条西7丁目で設立申請があったとされている。
- 14）先述の赤沢鐘美・ナカ夫妻による新潟静修学校附設託児所もそのルーツは子守をしながら通う生徒が授業に集中できるよう、乳幼児を別室に集めたのが始まりとされており（汐見他2017：98）、子守学校的な要素が強かった。
- 15）当時の製麻会社の労働状況や職工の募集等については札幌市教育委員会編（1994：423-33）を参照した。
- 16）出典は読売新聞北海道支社編（1979：110-1）だが、そこに示されている札幌市刊行の「札幌のあゆみ」には当たっていない。
- 17）北海タイムス（明治39年4月3日）より。
- 18）ただし、札幌市教育委員会編（1994：620-1）をみると、札幌でも米の小売価格は、大正7年1月から8月にかけて白米一石27円10銭だったのが50円近くまで高騰しており、8月15日付の小樽新聞によると米価騰貴問題について区民大会開催を呼びかける張り紙が出回るなど民衆の関心が薄かったというわけではなかったようである。
- 19）桜井（1989：25）によれば1924（大正13）年から1926（大正15）年の3年間で全国の季節託児所数は48カ所から549カ所と10倍以上に増えている。ただし勅使（1981）は大正期にはほとんど数は増えておらず、急増したのは昭和期に入ってからであると述べている。たしかに昭和初期に入ってから増加率はさらに高くなっているため、大正期に増加したという評価は一定の留保が必要かもしれない。
- 20）『札幌市勢一覽』によると1924（大正13）年の農家の総戸数212戸のうち、自作農としてではなく何らかの形で小作農に従事しているのが150戸（小作のみ112戸と自作農との兼業38戸）と全体の70%を超えている。
- 21）ここで示されているのは全道の争議発生件数である。地域別件数は明らかではないが、札幌に限るとさらに少なくなる。
- 22）例えば坂本（2001）の記述や園史である札幌保育園（1992）に寄せられている祝辞には「札幌にできた保育園の第一号」「道内初の保育園として創立」「託児専門施設として本道で初めて創設」といった文言がみられる。
- 23）北海道は1890（明治23）年から1894（明治27）年までの出生数に占める私生児数の割合が2割を超えており、これは全国の3倍から4倍も多い。
- 24）例えば明治38年度納付予定の全道の地方税額88,000余円のうち、札幌・小樽・函館三区の貸座敷・芸娼妓の地方税合計額は37,824円にのぼったため「芸娼妓は地方税の好財源」と書き立てる新聞もあったという。
- 25）「細民」という言葉について、大石（1995）の説明を引用しておく。「簡単にいうと貧困者のことなのだが、「細民」というのは一応生業を持って仕事（肩拾い、日雇い、葬祭人夫、車引き等々）をしているが、かつかつの生活状態で、長雨でも続くとたちまちどん底生活に陥る階層を指している。もちろん保護階層は細民階層には含まれない。」〔大石1995：8〕
- 26）大石（1995）によれば、この移転の際に取得した建物の費用6,000円は全額一般からの寄付によって賄われたという（大石1995：10）
- 27）育児園の理事長には北海タイムス社長でのちに札幌区長となる阿部宇之八、フルヤキャラメルをつくり出した古谷辰四郎、写真業界のリーダーであった三島常磐などがいた。
- 28）例えば一番ヶ瀬他（1962）と汐見他（2017：110）では明治・大正期における工場託児所の評価は対照的である。